

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

F. その他

④その他

取組を進めるに当たり困難であった事例について

F. その他

④その他

《人社系》

●北海道大学法学研究科法学政治学専攻

「バックグラウンド多様化を活かす大学院教育」の事例

＜事業を推進するのに不可欠な人員の確保と維持＞

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

特任助教や事務担当者の安定雇用に著しい支障が生じた。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

予算の配当が1年目(実質半年足らずの事業期間)に偏りすぎており、また毎年度の配当額が不確定なため、長期的視点からの、特任助教や事務担当スタッフの安定雇用、維持が非常に困難であった。最後は、実質ボランティアで翻訳や通訳をしてもらうことになった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

2年目、3年目の配分額を事前に決定し周知すること。1年目と2年目以降の配分額の極端なアンバランスを避けること。

《理工農系》

●東京農工大学工学府応用化学専攻

「科学立国人材育成プログラム」の事例

＜博士後期課程入学者の確保＞

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

残念ながら、博士後期課程入学者を大幅に向上することができなかった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

これは社会的な要因が大きいと考えられる。就職不安からか、マスターからドクターへの進学者が激減する時代に入ってしまった。科学立国人材育成プログラムは明らかに実践力のあるドクターを育てる仕組みであることは間違いないが、入学者の絶対数が少ないのではどうにもならない。分野にもよるが、応用化学専攻、電気電子専攻は大幅減、生命工学専攻はそれほど影響は受けていない。

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

### F. その他

#### ④その他

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

農工大ドクターOBによる進路説明会を通じて、ドクター進学を促したり、教員を含めた合宿によりドクター・マスター融合の研究交流会を開いたりした。一部効果は見られたが、ドクター進学不安は社会現象であり今後の大きな課題である。

## ●名古屋大学理学研究科物質理学専攻物理系

### 「モノから生体をつなぐ物質科学者養成」の事例

#### 〈後期課程への進学率の向上〉

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

1. 後期課程進学に対する動機付けを与えることを目的の一つとして、(18年度、)19年度、20年度は前期課程入学時に「将来計画と研究計画」について発表させた。しかし、多くの学生は大学院入学時にはすでに前期課程修了後に就職することをかなり強く決めていて、発表の場が結局は前期課程後の就職希望を宣言する場となりがちであった。
2. 「物性生物物理学総合講義」の一つの目的も、多様なキャリアパスを提示することによって後期課程への進学を増やすことにあり、なるべく博士学位をもつ、アカデミックな分野以外で活躍する方に講演をお願いした。しかしながら、博士学位が必須であるあるいは博士学位があれば圧倒的に有利であるというような内容の話にはならない。従って、後期課程への進学の強力な動機づけとはならなかった。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

数年前から、博士学位取得者の進路がマスコミ等で取り上げられるようになった(「余剰博士」、「高学歴ワーキングプア」など)。これらの実態が明らかになることはよいことではあるが、一方、後期課程への進学意欲を妨げる要因であることは間違いない。残念ながら、現状においては、大学院のみの努力ではいかんともしがたい面がある。

本専攻の事情としては、09年度をもって定年退職する教授が3名いたことも後期課程への進学者数減少の一因になった可能性がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

1. 前期課程入学時の発表をやめ、21年度からは前期課程の中間時に、研究内容に重点

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

### F. その他

#### ④その他

を置いた発表させることにした。効果については今後検証の必要がある。

2. 多くの学生が大学院入学時には前期課程修了後の就職を決めている。従って、後期課程への進学率を上げるためには、学部教育において研究の面白さ、キャリアパス教育を進める必要がある。(本プログラム終了後の) 22年度からこれまで学部3年次に行ってきた最先端研究に関する講義に加えて、2年次学生に対しても同様の講義を行うことにした。
3. 博士課程修了者の社会での評価を上げるために大学院において実施できることは、さらに幅広い能力の向上が図られるようなプログラムをさらに続けることであるが、効果を上げるためには時間はかかるのではないかと思う。

## ●九州工業大学情報工学府

### 「モジュール積み上げ方式の分野横断型コース」の事例

#### <大学院におけるコースワークに対する学生の意識改革>

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

体系的なコースワークとしてモジュールコース制を導入し実施した。意識の高い学生はそれに反応して積極的にモジュールやコースの習得を行っているが、単に単位取得だけを目的とした講義の履修方法を取っている学生がまだそれなりにおり、コースワークに対する意識改革を全学生に浸透させるまでには至っていない。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

モジュールやコースの習得は義務ではなく学生の自主性に任せていることと、大学院の修了条件が修得単位数だけであることから、単位数だけ揃えて修了すればよいという意識の学生がいるため。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

学生への周知と啓蒙を行うためにコース・モジュール制の趣旨を説明する冊子を全学生に配布している。また、モジュールやコース設定を毎年度見直し更新している。コース修了者には、修了時にコース修了証を授与している。これらにより徐々にコース履修者が増える傾向にはあるが、頭打ちになりそうな傾向もみられる。さらに末端の学生にまで意識改革を浸透させるためには、モジュール習得やコース履修状況を成績表に記載するなどして就職活動に活用させるなど、学生にとって具体的なメリットが肌で感じとれるような施策を講じれば良いと思われる。